

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業）
分担研究報告書

成人発症の短腸症候群による腸管不全の研究：

（H24 - 難治等（難） - 一般 - 015）

分担研究者 貞森 裕 岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 消化器外科 准教授

研究要旨

【研究目的】発症時に20歳以上であった成人発症の短腸症候群によって腸管不全に陥った患者を後方視的に解析し、その病態・合併症および予後を把握することである。

【研究方法】多施設共同による5年間の後方視的観察研究を行った。対象は、高カロリー輸液を必要とする短腸症候群と診断された症例とし、最終生存（または死亡）確認日、残存小腸の状況、高カロリー輸液からの離脱・実施状況、中心静脈ルートの閉塞・カテーテル感染状況および肝障害・腎障害等の他臓器合併症について解析した。

【研究結果】発症時に20歳以上であった成人発症の短腸症候群患者は、51症例であり、平均観察期間190ヶ月にて生存43例・死亡8例であった。発症時年齢は中央値で32歳であり、原因疾患はクローン病19例・SMA血栓症9例の順に多かった。残存小腸の長さは中央値で75cmであり、23例(45.1%)が50cm以下であった。また回盲弁の有無に関しては、回盲弁の残存しない症例が51例中40例(78.4%)を占めていた。中心静脈栄養から離脱できた症例は7例(13.7%)のみであり、44例(86.3%)は中心静脈栄養から離脱できない症例であった。何らかの経口摂取が可能な症例は32例(62.7%)に認められたが、経腸栄養が施行されている症例は4例(7.8%)であった。中心静脈カテーテル合併症では、33例(64.7%)にカテーテル感染を認め、カテーテルによる血管閉塞は8例(15.7%)に認めた。他臓器合併症では、肝障害を16例(31.4%)に、腎障害を15例(29.4%)に認めた。

【結論】本邦における成人発症の短腸症候群による腸管不全患者の症例数・病態・合併症および予後を把握し得た。今後は成人発症の短腸症候群患者に対する予後因子を特定するための前方視的観察研究を行うと共に、小腸移植の適応判断に関する更なる検討が必要である。

